

多様性を認識しよう

1. 大学あなどるべからず

昨春、神奈川県地区の大学輸出管理担当者勉強会（KEA Net）に、幹事の先生の御厚意で出席させていただきました。

大学の先生方はしばしば「企業と違ってウチの輸出管理は後発だから」と謙遜されますがとんでもない。席上での報告や会話は、内容も意識も相当なハイレベルで、とても勉強になりました。

今日は、勉強会の中で特に感銘を受けた演習のことをお話したいと思います。

2. 演習の内容

それは留学生受入可否の判断を問う事例演習でした。志望者について下表のような背景・特性を想定して「あなたならどうする？ その理由は？」を出席者に発言してもらうというやり方です。

項目	想定された背景・特性
国籍	1；ホワイト国 2；非ホワイト国 3；懸念国
原所属	1；外国ユーザーリスト掲載でも軍関連でない 2；軍関連企業 3；外国ユーザーリスト掲載 or 軍機関
過去の研究テーマ	1；非軍事技術 2；Dual Use 技術 3；軍事技術
入学後の研究テーマ	1；非軍事技術 2；Dual Use 技術 3；軍事技術

出席者の御見解もそれぞれ興味深いものでしたが、私が特に感銘を受けたのは幹事の先生の総括でした。それは「同じ案件であっても、どうとらえるか様々な考え方がある。そのことを知ることが重要であり、それが演習の目的でもある」という趣旨のお話でした。

とかく「そのユーザーはマルなのかバツなのか」と「正解」だけ求め勝ちな私たちにとって、忘れてはならない「基本」だと感じたわけです。

3. 自らの中の多様性を認識しよう

様々な考え方（「正解」）の存在を知ることの重要性は、みなさんも異議の無いところかと思えます。

そこで私からもう1つ付け加えたいことがあります。それは「自分の中の多様性を認識すること」の重要性です。

簡単に言うと、誰でも意見は時と共に変わることを自覚し、それを受け入れましょうということです。養老孟司先生のおっしゃるように「情報は不変だが、自分は日々変化する」のですから。

また今この瞬間「A という判断」をしている私たちの頭の中も「A 一色」ではありません。

「B もありうるけどなあ」という要素が大抵は混ざっているものです。そうである以上、**意見が変化するのはむしろ自然なこと**なのです。

輸出管理だって同じです。前回 OK したのと殆ど差のない案件で「今回は駄目」と言いたくなくとも、それはなんら不思議なことではありません。

それを世間では「ブレる」と呼んでネガティブにとらえます。たしかに審判のストライクゾーンがコロコロ変わるのはいは好ましいことではありません。しかし変わるのはいごく普通のこと。特別に恥ずる必要はありません。

むしろ**恥ずかしいのは「自分は変わっていない」と思い込むこと**ではないでしょうか？他人に向かっては「おまえはブレた」と言いながら、夫子御自身については「首尾一貫している（そして正しい）」と信じ込んでいる人。ほら、「自分は絶対催眠術にかからん」と肩を怒らせている人ほど技をかけやすいそうではありませんか。あれと同じです。

輸出管理で同じことが起こるとしたら取引審査だと思います。

輸管部門としては気の進まない案件なのだが、幹部が「違法じゃないんだろ」とか「合法性を役所に確認してこい」などと言うケースが時折あります。上の指示だから仕方なく役所に相談すると「合法だから御社の肚で御判断を」と言われ、「なら OK じゃん」と話が決まったりします。

それでいて、世間が騒がしくなると一転して「こんなとこ（例えば中国の軍工四証認定大学）駄目に決まってるだろ」と言い出すわけです。おそらく御本人としては、自分の意見が変わったという自覚もないままに。

逆のパターンもあります。社内に「あれもリスクだ、これもリスクだ」と騒ぐ管理屋さんがいたとします。ところが上の方が「合法だったらいいじゃん」とのたもつた途端にコロッと転向してしまう。

繰り返しますが、**意見が変わること自体は悪ではありません**。（変わった方がよいケースもあることすし）**変化を認識できないことがまずい**のです。逆に言えば**肝心なのは「変化をコントロールできること**」なのです。

私が「**自らの中の多様性を認識しよう**」というのは、**まさにそのため**なのです。自分の判断の根拠と、敢えて選ばなかった別の選択肢とを「見える化」すること。それは、意見のフラツキを防ぐとともに、必要が生じたときには君子豹変を敢行するためには、とても重要なことだと思ひます。

冒頭で紹介した留学生受入可否の演習、3月20日開催の EFA（Export Control for Academia）シンポジウムでも採り上げられると聞いています。席上披露される様々な「正解」は、きっと私たちの物の見方を広げてくれることすでしょう。